

令和7(2025)年産 水稻生育診断速報第6号(秋耕を行いましょう！)

令和7(2025)年10月10日

上都賀農業振興事務所

- 再生稲(ひこばえ)は病害虫の生息場所になるため、早めに耕起を行いましょう。
- 早期に秋耕を行うことは、来年の土づくりにもつながります。

秋耕を行うメリット

(1)病害虫防除

(ア)斑点米カメムシ類

越冬に入る前の斑点米カメムシ類にとって、出穂した再生稲(ひこばえ)は格好のエサになります。耕起を行うことで再生稲の出穂を抑え、生息場所を減らすことで、越冬前の害虫密度を低く抑えることができます。

令和7年産は、越冬成虫が水田に多く飛来したものの、適期防除がなされたため、大きな被害は出ませんでした。来年産のために秋耕を行い、生息場所を減らしましょう。



写真1 成虫で越冬する主な斑点米カメムシ

(イ)イネ縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

コシヒカリなど感染株の再生稲をヒメトビウンカが吸汁し、縞葉枯病のウイルスを保毒すると、体内に保持したまま越冬し、翌年の感染源となります。

コシヒカリなど抵抗性を持たない品種を作付している地域では、保毒虫率を減らすことで、翌年の初期発生を抑えることができます。

今年、鹿沼市内のコシヒカリほ場で縞葉枯病の発生を確認しており、感染拡大を防ぐために秋耕を行いましょう。



写真2 ヒメトビウンカ



写真3 穂の出すくみ

(2)土づくり

稲わらや稲株はケイ酸を多く含んでおり、水田にとって有効な有機物です。

分解を促進するには、気温(地温)が高く、水分の多い状態が望ましいため、収穫が終わった後が最適です。晩秋の耕起では、温度が確保できず土壌も乾燥しやすくなり、分解が進まなくなります。

未分解の稲わらや稲株は、耕起や代かき等春作業に支障がでることと併せて、移植後のメタンガス発生を助長し、初期生育に影響を及ぼすことがあります。

作業のポイント

- できるだけ早めに耕起作業を実施しましょう。
- 耕起する深さは、10～15cmで行いましょう。